

第24回スタディツアー 感想

山中 勇

スタディツアーに行く前、『ひとひらレポートNo.8』に「ワンドロップ小学校はどうなっていくのだろう」ということを書いた。

——バングラデシュの教育方針が変わったらしい。これまでは教科指導が中心だったのを、音楽や美術などの芸術科目も取り入れて、教師が一方的に知識を教え込む指導法を変えるらしい。子どもたちが感じたこと、考えたことを引き出して対話しながら授業を進める。道徳面の授業も取り入れるとか。週休2日制も始まっているそう。これらはワンドロップ小学校が目指しているやり方と共通していることではないか。

ワンドロップ小学校の将来をどうしていくか、という話をしているとき、「この学校の教育を充実発展させて、バングラデシュの教育のモデル校として評価されるようになれば、国の支援も得られて存続が可能になる」というような意見があった。

それを聞いたとき、運営資金の面、設備・教材・備品の面、教員の教育力・指導力などの現状から見て、ワンドロップ小学校ではとても無理なことだと感じていた。

実際、無理な話だと今も思うが、ワンドロップ小学校の教育理念、カリキュラム、授業方法などは、大げさだけどバングラデシュ教育のモデルになってもいいものだとと言えるかもしれない。

「学校はよりよい大人になるために学ぶ場所です」

よりよい大人になるために、

1. 時間を守る。
2. 感謝の気持ちを伝える。
3. 自分を清潔にする。
4. 教室、学校、持ち物を大切に扱う。
5. 友だちを大切に。助け合う。教え合う。注意し合う。

これらの項目は、バングラデシュの人づくりのためにとても重要な教育目標になってもいいことではないか。ランチを無償で提供しているのも、これからのバングラデシュの公立学校のモデルになってもいい。保護者の授業参観も、取り入れてほしい取り組みだ。

今、大西さんはネットでワンドロップ小学校の先生らと会議をしているそう。ロシュミアもそこに参加している。彼女は日本の大学で勉強しているから、日本の学校教育についても学ぶことが多いだろう。その経験からワンドロップ小学校の先生らに的確な提案ができる。また、彼女は、ワンドロップ小学校の取り組みをネットで情報発信してクラウドファンディングで資金を集めることもやってみたいと



言っている。

ワンドロップ小学校は、その言葉どおり大海の一滴でいつ消えてしまうかも知れない小さな取り組みでしかないけれど、なかなか夢のあることをしていると自負してもいいのではないか。そして、もしかしたらワンドロップ小学校が存続していく道が開けることになるかもしれない、とちょっと馬鹿げた発想で考えてみた。



〈生徒数は減ったが、とてもいい雰囲気だった〉

今回のスタディツアーに参加して、子どもたちと先生らを見ていて、ワンドロップ小学校がバングラデシュの教育のモデル校になったらいいのに、と本気で思っている。子どもたちもそんなに賢くはなく、先生たちの教育力も未熟で心もとないけど、明るくて楽しく

て元気いっぱいなのがいい。

スタディツアー中に、3社の新聞社が取材に来た。タリクさんに言わせたら、3流の新聞社だというのが、バングラデシュの通常の学校とは違う魅力があるから取材に来るのだろう。今、運営資金の資金繰りに頭を痛めているワンドロップの助けには、すぐにはつながらないだろうけど、記事を見て支援の手をあげる人がいるかもしれない。

〈駆け引き〉

大西さんとタリクさんのあいだで、厳しいやり取りが交わされた。2024年度以降の支援の在り方は前回のスタディツアーで決めたとおりにワンドロップはランチ代の支援はしないとしたら、「ランチはストップだ」とタリクさんは言う。ランチが目的で学校に来るとするのは筋違いだとしても、実際のところランチがなくなれば多くの生徒は来なくなるだろう。妥協案として、今回は30万円を負担して、8月には10万円をランチ代に見合うものとして負担する。2025年度からは、ランチ代も先生サラリーも現地負担にするとしたら、立ちまちワンドロップ小学校は閉鎖ということになってしまう。先生たちとの雇用契約は今年度1年契約だから、25年度の契約更新はできないということで解雇になる。しかし、それだけは避けたい。

タリクさんは、ワンドロップ小学校をやめて技術専門学校に切り替える、校舎をお茶の工場に利用する、そんなことを考えるかもしれない。ワンドロップ小学校も来年1月で創立10周年。10周年の節目で閉校するのもやむを得ないか、と後ろ向きに考えもした。

しかし、子どもたちのことを考えると、ここで終わりにすることはできない。ヨーコさんとロシュミアは、タリクレストランの一角で、日本料理でたこ焼きの販売を計画している。ロシュミアはネットで情報発信して賛同してくれる人を募って資金集めをする。タリクさんもマスコミを利用して支援者を探すとか、地域の有力者に支援を求める活動などをする。タリクさんの事業が業績を上げて運営資金の負担ができるようになることを期待する。

今のところ確実性があるのは、ワンドロップが集めることができる資金ぐらいで、ほかには当てにできるものはなさそうだ。しかし、バングラデシュの側で、努力していこうという動きさえあれば、当面はワンドロップの蓄えも使ってやりくりしながら道が切り開かれるのを待つしかない。カレー販売や寄付などで1年間に50万円ほど集めて、300万ほどある蓄えを切り崩しながら4～5年は持ちこたえられるのではないかな。

〈マジュンダーワンドロップ小学校は、誰のもの〉

タリクマジュンダーのもの？ ワンドロップのもの？

経営者が、資金繰りができなくなって倒産？廃校？

学校は、そこで学んでいる子どもたちと、教える先生たちが主人公。経営者の都合で廃校、閉鎖されたらたまったものではない、と先生も子どもたちも怒らなければならない。閉校反対のストライキですね（笑）。



そのためには、先生方がもっと賢くなって、自分たちの教育活動に力をつけて、子どもたちの教育を保障するために全力で取り組まなければならない。

これまで先生方の要求は自分たちのサラリーをアップしてもらうことだけ。決められた時間に登校して、決められた授業をして、ランチは子どもたち以上にたくさん食べて、授業が終わったら下校、あまり成長が見られない。これではだめですね。

授業研究をする。生徒の情報交換をする。年間教育目標を立てる。家庭訪問をする。教材の開発をする。することはいっぱいあって、それらをして教師のプロになる努力をしなければ。閉校になったら収入がなくなるから困る、ということではなくて、こんなに大事な学校をつぶされるのは認めない、と怒るようにならなければ。

今回のスタディツアーと、そのあと小学校に残ったヨーコさんと先生方との動きを見て感じていることがある。これまでは日本人から先生に対していろいろ指摘して、注意して、改善を求める一方向の関係だったけど、今は、先生方と日本人（今のところ現地のヨーコさん、ライン通話を通して大西さん）が困っている生徒のことで相談

し、家庭訪問をして親の説得にあたる動きもできている。ふだんの授業の工夫も、ヨーコさんが先生らに働きかけて進んでいるようだ。欠席者のチェック、皆勤生徒の表彰などの話も進んでいる。保護者の授業参観にも取り組んで、先生たちの動きが一步ずつ前に向かって進んでいるようだ。資金繰りでワンドロップが頭を痛めていることを先生らに



も知ってもらい、学校存続のためにできることを協力してやっつけていこうというようになればいい。「資金がないから廃校というのは認めない！」と主張するぐらいになればいい、と突飛なことを考えている。

学校運営の面では、大学の春休みに帰省するロシュミアが、ヨーコさん、大西さんと一緒に前に進めてくれるから、ワンドロップ小学校は、もっともっと良い学校に進んでいこう。

資金面のやりくりはなかなか順調にはいきそうにないから、2025年に先生サラリーが支給できないという緊急事態に陥るかもしれないが、閉校しないようにみんなで頑張るしかない。